

家が差し押さえられて  
人生終わりかと思ったら

# 親戚の初恋の お兄さんに

引き取られ酔ってる所  
を夜這いしたら

理性ブチ切れ  
大人ちんぽで  
おまんこ分からされちゃった話



ろこもこうさき

絢辻 透

”しばらくの間、千春を頼みます”

父親からの手紙が机に置かれている。

座敷机に所在なく座る私と、そんな私を囲む親戚たちは、全員もれなく困った顔でその手紙を見つめていた。

当たり前だ。いくらギャンブル狂いの父親と言えど、今までこんなことはなかつた。夏期講習を終えて帰つたら、家が差し押さえられていた——なんて。

「まさか借金があつたなんて……」

「アイツ、千春ちゃんだけはちゃんと育てるつて息巻いてたのに」

「しばらくの間つてどんくらいなんだよ、なあ？」

「帰つてくるかもわからないわよ、こんなの……」

お母さんが私の小さい頃に亡くなつてから、すっかりギャンブルにハマつてしまつたお父さん。競馬で負けて、パチンコで負けて……それでも、私をどうにか大学まで入れてくれた。

（学費は大丈夫って言つてたのに、どうして……）

「親戚たちの生産性のない会話を聞きながらうつむいていると、突然、縁側のほうからガラガラと勢い良く障子の扉を開ける音が響いた。

「あー、やっぱ婆ちゃん家か。よかつたよかつた、家いねえから焦つたよ」「そ……宗一郎！？ あ、あんた今までどこに……っ」

あちこち跳ねた髪の毛と、無精ひげを生やした顔。

大きな身体で窮屈そうに鴨居をくぐつて辺りを見回している。

親戚一同が騒然とする中、誰だっけこの人、見たことある気がする……と、私は首を傾げていた。

「さあね、どこでもいいだろ。事情は聞いてる、千春は俺が預かるから」

——預かる？

どういうことかわからない。親戚から矢継ぎ早に飛ぶ質問を一切合切無視したその人に「千春どこ？」と呼ばれ、慌てて立ち上がる。

うお、でつかくなつたなあ、と笑う顔を見て、ようやく思い出すことができた。

「大丈夫、うまい飯食つてゆつくり出来るとこ連れてくだけだから。行くぞ、千春」

この人は——小さい頃よく私と遊んでくれていた、一回り年上の従兄弟。

葛城 宗一郎（かつらぎ そういちろう）さん。

私の、初恋の人だ。

鳥の鳴き声で目を覚ました。

広い和室で慣れない布団だつたけれど、不思議とよく眠れた気がする。

起き上がって、窓の外を見る。青々とした田んぼと、いくつも連なつた山が見えた。

何もねえ所で悪いけど、夏休みいいっぱいはここで過ごして——と言わ�て連れてこられたのは、うちから二時間以上離れた山間の町の、高台にある大きな屋敷だつた。

「千春ー、起きたかー？ 朝飯あるから冷めねえうちに来いよ」

「あ、はい……つ」

扉の向こうから宗一郎さんの声が聞こえる。

ずいぶん古いらしいお屋敷は、中はリノベーションされていて旅館のようにつれいだつた。

宗一郎さんは、どうやらこのお屋敷にひとりで住んでいるらしい。  
慌てて着替えて、部屋から出る。

「おはようございます……宗一郎さん？」

「はよ、あー、こつちこつち」

三十畳はありそうな広いリビングは洋風に改装されていて、床はフローリングだ。大きなテレビやL字のソファも置かれている。

きよろきよろとしていると、隅のほうのダイニングテーブルから呼ぶ声がした。急いで行こうと思つて早足で歩み寄るもの、座つている宗一郎さんの姿を見て思わず足が止まつた。

「…………宗一郎さん…………ですよね？」

「んあ？…………ははつ、そんな違つて見える？」

椅子の上で片足を折つた、少しだらしのない座り方をしている宗一郎さんの姿が――かなり違つて見えたからだ。

昨日まで生えていた無精髭はなくなつていて、彫りの深いぱつちりとした目元が印象的だ。ぼさぼさだった黒髪も艶めいてきれいに整つていて。

少しヨレた白シャツのボタンは三個くらい空いているけれど、それにすらもなんだか色氣を感じてしまう。

小さい時、私を肩車して遊んでくれていたかつこいいお兄さんの面影そのままの姿に、どきりと心臓が高鳴った。

「えっと……髪がないからかな、すごく違つて見えちゃいました」

「まあな。剃っちゃうとさあ、みーんな俺に惚れちゃうから。敢えて生やしてんの」

つるんとした顎を撫でながら笑つている宗一郎さんが眩しい。

確かに、と頷くと、ばか、冗談だよ！ 千春に不潔に思われたくねえだけ！ とちょつと恥ずかしそうに言われてしまつた。

そんな風には思わないけれど……と思いながら席について、用意されていた豪華な焼き魚の朝食にいただきます、と手を合わせる。

「！ おいしい……これ、宗一郎さんが作つたんですか？」

「俺はこんな美味しいもん作れねえよ。家のすぐ下んとこの婆さんがさあ、年金だけじや暮らせねえつて言うからさ。朝飯作つてもらう代わりにちょこつと渡してんの」「そうなんですね……すごい、おいしい……」

「若い女の子来るつつたらすげえ張り切つちゃってさ。どつかから採れたての鮎貰つてきて。旅館みてえだよな」「ほんとですね。こんな食べるので、初めてです」

鮎の姿焼きと大根おろしに、ほかほかのご飯。お味噌汁は具沢山で、漬物は三種類もついていた。

家ではこんな豪華なご飯、食べたことがない。

このリビングよりも小さな中古住宅で、私とお父さんはいつも、スーパーで一番安い出来合いのものを食べていた。

「……大変だつたな。夏休み終わるまではゆつくりしていけよ。ここは静かだし、空は広いし、落ち着くぜ」

「はい……でも、お世話になるので。何か私に、出来ることがあれば……お掃除とか」「いいんだつて。千春、今まで家事と勉強漬けだつたらしいじやん？ 人生の夏休みが来たと思つてさ。なんも考えず、ゆつくりすりやいいんだよ」

言い聞かせるような言葉におずおずと頷く。

宗一郎さんはたぶん、お父さんから事情を聞いているんだと思う。

なにも教えてはくれなかつたけれど、預かつてきた荷物だという勉強道具や着替え、小物類などは私がいつも使つてゐる、お父さんしか知らないはずのものだつた。

「宗一郎さんは、ずっとここに住んでるんですか」

「そうそう。五年くらい前かなあ、母方のじいちゃんが大地主でさ、お前どうせ家に籠つてんならここの管理しろーつて頼まれて、そつからずつとこつち。じいちゃん、フリーランスの意味分かつてなくて、俺のこと引きこもりだと思つてんだよな」

「フリーランスなんですか、宗一郎さん」

「言つてなかつたつけ？　あーそうか、最後会つたの俺がまだ学生の時か……フリーランスだよ。ゲーム作つてんだ、俺」

「ゲーム？　すごい……」

最後に会つたのは、確か私が小学生低学年くらいの、お正月だつたと思う。昨日集まつていたおばあちゃんの家で、遊び相手がいなくて暇していた私に、お古のゲームをくれた

んだった。

——あまりよく覚えていないけれど、あの夜、何か揉めていたような。

「千春、覚えてねえかな。あの時、母方のほうが地主つてバレてさ。葛城家は……なんつか、そこまで裕福じやねえだろ？ 無心されて、父さんがブチ切れちゃつて。そつからもう、葛城家には二度と帰らん、お前も連絡取るな！ つって」

「わあ……そだつたんですね」

「あの時、千春の父ちゃんだけはタカんなかったんだぜ。一番金なかつただろうに」

けらけら笑う声に釣られてふつと吐息が漏れる。

お父さんは確かにギャンブル狂いだつたけれど、借金をしたり、集つたりはしない人だつた。どうして借金なんか……と思つていると、先に食べ終わつたらしい宗一郎さんが席を立つた。

「ご馳走さん。俺、いつもリビング横の部屋で作業してるからさ。千春はここでのんびりして。そこのテレビに繫がつてるゲーム、何でもやつてていいから」

屈んでぽんぽんと頭を撫でられる。

頷くと、よし、と笑顔を見せられた。緩む目元があの時と変わらない。

「これからしばらく俺のことは……父親つてほどの年じやねえか、多分、うん。お兄さんだな、お兄さんだと思つて。な」

宗一郎さんは笑いながらそう言い残して食器を片付け、向こうの部屋に戻つていった。

(……宗一郎、お兄ちゃん)

懐かしい響きだ。

囁み締めるほどに自分が恥ずかしくなる。

家を差し押さえられ、父親の行方もわからず、初めての場所に連れてこられて。不安でいっぱいなはずなのに、それ以外の胸の高鳴りを自覚してしまつっていた。

——だつて、また会えてうれしい。  
大好きだつた、宗一郎お兄ちゃんに。

「……つあ、あ、いけた、いけました、クリアだ……っ！」

「すげえ、倒すの早かつたなあ千春！　けど実は……？」

「え……？　まさか、ま……まだ……！？」

画面に現れる真のボスを見て愕然とする私を見て、宗一郎さんがけたけたと笑っている。  
宗一郎さんの家でお世話になるようになつてから十日。  
夜はいつも、こうしてオススメのゲームをして過ごすようになった。

「ううつ、もう体力ないから倒せない……」

「いけるいける、回復アイテム使つてなかつただろー？」

こんな初心者のプレイなんて見てて楽しいのだろうか……と思うのだけれど、宗一郎さんはいつも私が四苦八苦して進んでいく様子を時に褒め、時に笑つて見ていてくれる。お陰でなんとかクリアまでこぎつけることができてすごく楽しい。

「つーか千春、顔赤いな。大丈夫か？」

「あ……私、ボス戦中、息止めてたかもしないです……」

「ははっ、すげえ集中力。ちょっと休憩しようぜ、棒アイス貰つたから」

そう言つて立ち上がつた宗一郎さんの、背の高い後ろ姿を盗み見る。

——ゲーム以外でも、宗一郎さんはすごく優しかつた。

来てすぐの時は、落ち着かなくて部屋にこもりがちだった私を、猫がいるからと外に連れ出して、可愛いキジトラの子を紹介してくれたり。

どこからか大きいスイカを貰つてきて、二人でスイカ割りをしたり。

近くのきれいな川まで遊びに行つて、一緒に水切りをして遊んだりもした。

宗一郎さんとお屋敷で過ごす日々は、まるで物語で見る夏休みのようで、人生のどの時よりも楽しくて。

私が、ずっとここで宗一郎さんと過ごしたいと思うようになるまで、そう時間はからなかつた。

「あ、もうこんな時間ですね……お風呂入らなきゃ」

「そうだなー、真ボスはまた明日にすつか」

「はい、明日がんばります」

アイスを食べながら頷く。千春ならすぐ出来るだろ、と笑ってくれた。  
明日も楽しみだな、と思いながらお風呂に向かつた。

(……どうしたら、ずっとここにいられるかな……)

服を脱ぎながらぼんやりと考える。

お父さんは「暫くの間」と言つていたから、そのうち帰つてくるのだと思う。

家が無事かはわからぬけれど、そうなればいつまでも居させてもらうわけにもいかない。

私がもつと便利な存在になれば……と思うが、宗一郎さんは一人暮らしが長いからか、家事は卒なくこなしてしまう。

お掃除なんかはちょこちょこ近所のお婆さんに頼んでいるようだけれど、それも出来ないからというよりは相手を思つてのことだろう。

(こないだは下のお婆さんに、お嫁さんだつて、勘違いされちゃつたんだよね)

いつも美味しいご飯を作つてくれるお婆さんにご挨拶をしたときに、まあこんな若くて可愛い嫁さん連れてきたの！ と言わてしまつた。宗一郎さんは焦つた顔で嫁さんじやねえよ！ と否定していたけれど、私はこつそり嬉しがつていたのだった。

お嫁さんになれば一番うれしいけれど、どうしたらなれるだろう。

シャンプーをしながら私は考えに考え、そしてひとつ結論に辿り着いた。

(——そうだ、夜這いしよう)

既成事実。そう。既成事実があれば。

決心してから私は毎日チャンスを伺っていた。

といつても宗一郎さんは寝るのが遅いし、仲間内と仕事の話をしていたりで忙しそうな  
ことが多い。なかなかいい機会がないな……と焦っていたある夜のこと。

珍しく夕方ごろに出掛けた宗一郎さんがついぶん酔つて帰ってきた。

「！ 宗一郎さん、おかえりなさい。わ……大丈夫ですか？」

「ただいま、いや一飲まされたわ……酒臭えよな、ごめん。風呂入つてくるから先寝てろよ」

今日は何かの作業が終わつたらしく、仲間内で飲み会だつたようだ。

宗一郎さんはいつも晩酌をしているが酔つた姿は見たことがなかつた。今日は顔も赤いし、足取りもどこかふらふらとしている。

大丈夫だろうか、という気持ちと、絶好のチャンスだ、という気持ちが湧き上がる。

（今日なら……もしかしたら……！）

私はそのままおやすみなさいを言つて、部屋で寝たふりをして深夜を待つた。そしてもう2時を過ぎる頃、ばくばくする心臓を抱えながらも、宗一郎さんの部屋に忍び込むことに成功した。

（ね、寝てた、良かった……。えつと、まずは……起こさないように、布団の中に入つて……）

静かに寝息を立てていてる宗一郎さんの寝顔にドキドキしつつ音を立てないように布団に近づく。

夜這いのやり方は全くわからなかつたのでスマホで調べた。

震える手で布団をめくり、宗一郎さんの体温でとても暖かなその中に寄り添うように身体を潜り込ませる。

(こ、ここまでいつたら、宗一郎さんの、服を脱がせて……！)

ごくりと唾を飲み込み、覚悟を決めてスウェットのズボンに手をかけ、少しずらした瞬間だつた。

大きな身体が突然身じろぐ気配がして「ひえっ」と声が出てしまつた。

「——ん……、……千春……？」

「あわ、あ、お、起き……っひや、」

「なあんだよ、そんなに慌てて……んあ……？」

眠たげな、吐息の混じつた低い声に体が固まる。

ぱーっとした目でこちらを見る宗一郎さんに、スウェットを握ったまま固まる手を取ら

れてしまつて全身が熱くなつた。

「あ、私、その、あの、ご、ごめんなさ……つ」

「……もしかして、襲おうとしてた？ ダメだろ。危ないぜ、特に、俺みたいなのはさ」

ゆらりと起き上がつた宗一郎さんに、両手ともシーツに縫い付けられて、覆い被さられてしまつた。

月明かりに照らされた顔が、どこか熱に浮かされたようだ。

「ご、ごめんなさい……その、私、宗一郎さんと、ずっと一緒にいたくて……つ

「ふーん……それで、酒飲んでたから起きねえうちに襲つちやおう、つて？」

「うう……ごめんなさ……つひや、つ」

「悪い子だなあ、俺はずつと我慢してたのに。こんな事されたら、抑えらんなくなつちまうだろ……？」

首筋で、ちゅ……つ♡ と音が鳴つた。くすぐつたさに身体が震える。

どうしていいかわからなくて逃げたくなるけれど、今まで見たことがないような熱を孕んだ視線を向けられて、何も動けなくなってしまう。

「が、我慢……？」

「そうだよ。これでも必死だつたんだぜ？　あの泣き虫だつた千春が見違えるくらい綺麗になつて――……なあ。千春、なんで俺がお前より遅く寝てたと思う？」

「へ……わ、わからな……つ」

囁くように低く囁かれて身体がぶるりと震えてしまう。  
こつんとくつつけられた額がひどく熱い。

「千春が寝た後に、千春で抜くため――な、危ないだろ？」

「ひ、ひえ……つあ！？　く、くすぐつた……待つ、は、恥ずかしい、宗一郎さん……！」

ちゅ♡　ちゅ……つ♡

信じられないことを悪戯っぽく囁かれて、細い悲鳴しか出ない。

何度も首筋や鎖骨に吸い付かれてくすぐつたくて身じろぐ。自分から布団に入つたし、望んでいたことをされていたはずなのに恥ずかしくてたまらない。

勇んで夜這いしたものの、こういうことは全てが初めてだつた。

「ちょっとキスしたぐらいでそんな恥ずかしがつて、どうやつて俺を襲うつもりだつたわけ？」

「それ、は……く、くちとかで、つあう、つ！？」

「ダメ、宗一郎さ……っ」

「へえ、可愛いお口で『奉仕頑張ろうとしてたんだ。健気だなあ、でも俺がいつも考えてたのはさ……』

すり♡ すり♡ すりすり……♡

あちこちにキスされているうちにパジャマのボタンを外されてしまつていたらしい。キヤミソールの上からゆるゆると胸元を撫でられる。

自分が触られることは全然想定していなくて、それなのに身体は素直に触られたことを嬉しがつて、びん♡ と乳首の先っぽが硬くなつてきてしまつた。

「ここ触つたらどんな顔すんのかな、とか。気持ち良くてぐずぐずにとろけてるところ見てえなあとが、そんなことばつか……」

「ううううそ、あ、あつ！？」やつ、そこ、ううつ……♡」「

カリ♡ カリ♡

カリカリカリカリ……♡

ここ、つて言うみたいに、宗一郎さんの短く切りそろえられた爪先が布越しにもわかるほど硬くなつたそこを引っ搔く。

(うう……口でするのとか、上に乗るのとか、イメトレしてきたのに……！　おつきな身体に抑えつけられてて全然できない……つ♡　囁かれる度、うれしい♡　でいっぱいになつて……カリカリされると、お腹の奥、うずうずしてきちゃう……♡)

「ふ……ちょっと引っ搔かれたぐらいで、そんな顔すんの？　想像してたよりすげえエロい……あ、こら、逃げんなつて。自分から襲つてきたんだろー……？」

「つひい、ん……つ♡　ちが……からだ、かつてに、ああつ♡」

きゅ♡ すりすり♡

かりかりかり♡♡

服を着たつてわかつてしまふくらい膨らんだそこを摘まれる。

先程よりも強い刺激に身体が勝手に反応してずり上がつてしまふのを片手で止められて逃げ場をなくされてしまった。

「摘まんで捏ねくり回されるの好き？」 太ももすりすり押し付けちゃつて、かーわいいな  
あ、千春……」「やつ、あつ、あつ♡ そこばっかり、あ、うあつ♡」

きゅむ♡ こねこね♡ カリカリカリ♡

囁かれながら弄ぶみたいに捏ねられては引っ搔かれて、宗一郎さんの腕の中でびくびくと震えることしかできない。

無意識のうちに抱きついて、お腹にたまつた熱を逃がそうと腰をすり寄せてしまう。

「甘い声出しながら腰くねらせて、おねだり上手だな、千春う……？ ほら、乳首も嬉しそうにかたーくなつてる……もう片っぽもして欲しい？ なーんにもしてねえのに、ぴくつ♡ つて揺れてて、すっげえエロい……」

「（く）は、恥ずかし……あ、あつ！？♡ だめ、宗一郎さ……つそこ、食べちや、だめええ……つ♡」

するするとキヤミソールをたくし上げられてしまった。

胸の膨らみを辿るよう添わされた唇に慌てて身を起こそうとしたけれど、ダメって言うみたいに、ちゅうう……♡ と、乳首を吸われて頭に火花が散る。

「ん、ちゅ……♡ ははつ、ダメ？ 俺に食われに来たくせに？」

「ううつ……だつて、これ、あつ♡ き、きもち、よくなつちや……つんああ♡ うう、吸うの、やあ、あ……くくつ♡」

「だーいじょうぶだつて、気持ちいいの、しつかり受け止めとけよ。千春がぐずぐずになるどこ見てえつて言つたろ……？」

ちゅつ♡ れろれろ♡  
こりゅこりゅこりゅ♡

食べられてしまつた乳首を舌先で捏ね回されて、それなのにもう片方をいじるのもやめ  
てもらえなくて、どんどん腰に甘い疼きが溜まつていく。

(これ、むり♡ 吸われる度ぞわぞわしちやう♡ 自分で触つた時より全然気持ちよくて  
♡ こりゅこりゅされる度、頭ばちばちして♡ こんなのされてたらすぐぐずぐずになつ  
ちやう♡ あ、あ、乳首触つてた手、下にずらされてる……♡ どうしよ、さ、触られちゃ  
う……つ♡)

「……ははつ、下腹ひくひくして。なあ千春、もしかして期待してた？ ここ、触られち  
まうの……」

「つあ、あ、あ、だめ、そこ、は……つ！♡」

するる……♡ と手が下に降りていく。

宗一郎さんの手が目指しているそこは——どこまでできるか分からなかつたけれど、い

つでも使えるようと思つて——部屋に来る前に、自分で少し触つて濡らしておいた、ところだ。

その上、胸を吸われて余計濡れてしまつてゐる。

見られたくない逃げようとずり上がると、それを良いことにパジャマを脱がされてしまつた。

「……すげえな、千春、糸引いてる……胸だけでこんな、まんことろとろにしたんだ?」

「ちが、ちがうう……つも、見ちややだあ……!」

「違う? へえ……ああ、わかつた。準備してたんだろ。俺んとこ来る前に、自分で触つた?」

「くくくつ……うう……つ」

あつさり答えを当てられてしまつて恥ずかしすぎる。

身体を抑えられていて抵抗もできないのでせめて布団を手繰り寄せて顔を隠すと、宗一郎さんがくつりと笑う声がした。

「団星、ね。はー、マジで可愛いな……つーか千春、まんこ丸出いで顔隠してんの、すげえエロいけど大丈夫?」

「ひつ……も、やだあ、恥ずかしいから……！　言わないで、つんあ！？　あつ、あつ、あつ♥♥♥」

カリカリカリ♥

こすこすこすこす……♥

すっかりぬるぬるになつてしまつたパンツの上から、クリトリスを探し当てられて爪先で何度も往復される。

あまりの刺激に力をかけて開かされていたはずの足が自然と開いてしまつた。かくかくと腰が揺れてしまう。

「クリ好きか？　子犬みてえに腰揺らして、まんこヒクつかせて……そんなに好きなら、いっぱいシテやるよ……♥」

「ひい、んん……つ♥　や、まつて、宗一郎さ……あうつ、あつ♥　だめこれ、こし、とまんば……つ♥♥」

こすこす♥ すりゅすりゅ♥

カリカリカリ♥

はしたなく揺れる腰に合わせて何度もカリカリ♥ されて気持ちいで頭がいっぱいになっていく。

(だめ、きもちいい♥ クリきもちいい♥♥ 宗一郎さんの指、じぶんにするより絶対きもちいい♥ 熱くて大きくて、つあ♥ そこだめ、裏筋ぬる／＼つて伝つて、先端こりこりいじめるのだめ、頭ばかになつちやうくらいきもちいいよお……つ♥)

「ふ……腰浮かせてまんこ差し出して、気持ちよさそうでかーわいいなあ……千春、顔も見せろよ。ヨがってる顔、ちゃんと見せて?」

「やあつ♥ 恥ずかし、あつ、お布団とらないで、あつ……うう……つ♥」

「真つ赤な顔で目うるうるにさせてもだーめ。全部見せろよ、ずっと千春のこういう顔、見たかつた……」

布団を取られて、ばたついていた両腕もまとめて頭の上で束ねられてしまつた。みつともないほど感じてしまつてゐるところを宗一郎さんの熱っぽい瞳が余すところなく見つめている。

「ひい……ん……っ♡ 宗一郎さん、だめこれっ、やめて、わたひ、ああっ♡」

「今やめんの逆にキツいだろ、それとも焦らして欲しい？ イきそうになつてぶるぶる震えてるクリ、何回も寸止めされて……泣きながら、もうイかせてえ♡ つて千春からおねだりしてくれんなら、俺はそれでもいいけどな……？」

ちゅこちゅこ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅっ♡

ぐちやぐちやになつてしまつたパンツ越しに、愛液をまとつた指で強めに擦られて身体ががくがくと震え出す。イきそうなのもすぐバレてしまつて恥ずかしい。

「ううつ、やだあ♡ も、つあ、ううつ♡ やつ……あつ、とめ、とめるの、やつ……♡♡」「ははつ、やだやだ言うからやめて欲しいのかと思つたんだけど……やめられるほうが、嫌

なんだ?」

「…………ううつ…………ん、やめるの、…………やだあ…………っ♥」

「かーわい……ん、このまま千春のエロクリ、イくまでカリカリしていじめててやるから、俺の指でイケよ、千春……」

ぬる／  
ぬる／つ  
／

カリカリカリカリカリ……  
♥  
♥

甘やかに囁かれるながら一度は離された指をまたぬるぬると動かされて喉がヒクつく。止めたかつたはずの腰はかくかくと小刻みに震えて、足もびん♡と張つてきました。——熱に浮かされた表情の宗一郎さんが、耳元にちゅうう……つ♡とキスをしてきて、もうダメだつた。

びくんつ  
びくつ  
びくびくびくつ

いつて いる間中、 ずっと と顔を見つめられながら おまんこを 優しく 抑えられて、 あまりの

快感に仰け反ることしかできなかつた。

イつたあともふーつふーつ♡ とはしたない呼吸が止まらない。

「上手にいけたなあ、千春……ずーっとお前のことばっかり考えて抜いてたけど、非じやねえくらいエロくて興奮する……」

「はつ、……へ……？♡ つあ、あつ……宗一郎、さん……？」

愛おし気に頬へ口付けられて力が入らない。ビクつく身体がようやく収まつた頃、宗一郎さんが身体を下げる気配がした。

挿れてもらえるのかな……？ とドキドキしてそつと身を起こした瞬間、ぐちょぐちょになつたパンツを取られ、屈んだ宗一郎さんにおまんこをまじまじと見つめられてしまつた。

「あー……イつたばっかだから？ 千春のまんこの割れ目、ひくひくしてる……クリもてらでらしてて、すげえ美味そ……」

「へ……つ？ くつえあつ、あつ！？♡ だめ、宗一郎さん……っそんな、とこ、だめえ……つつ♡♡」

れろ……ちゅつ♥ ちゅむ♥

先程イつたばかりの敏感なクリに舌先が触れた。キスするみたいな音を立てて吸われて収まっていたはずの熱が戻つてくる。慌ててくしゃりと頭を掴むものの、両手とも抑えつけられてしまつた。

「ん……ダメじやねえだろ、千春、口でしてくれるつもりだつたって言つてたよな。じゃあ俺もさ、千春にしていいよなあ……?」

「そ……つんna、わたひ♥ も、いらな、ああつ♥♥ ひあ、あ、あつ♥」

れろ♥ れろ♥ ちゅ♥

れろれろれろ♥♥

必死に首を振るけど私のおまんこに顔を埋めている宗一郎さんには届くはずもない。甘やかにクリトリスを舐める舌先が気持ち良すぎて濁つた声しか出ない。

(しらない♥ こんなのしらない♥ 舌で全体包まれてぬるぬる擦られちやうのだめ、きも

ちよすぎて頭ばかになつちやう♡ やだやだ♡ こういうの、私がするんだつたのに……つ  
あ、あ♡ 吸われながら指……つぽつぽされてる、だめこれ……つ♡)

つぽ♡ つぽ♡

くりゅくりゅくりゅ……♡♡

濡れそぼつたおまんこの浅いところに、指が入つたり出たりしている。それだけで気持ち  
良くて鼻にかかつた甘い声が出てしまうのに、クリトリスを転がす舌も止めてはくれない。

「ん……ちゅ……：つはは、子犬みてえな甘い鼻息エロすぎ……はあ、この奥まで俺のにして  
えな……ちんぽでいっぱいにして、可愛くやだやだ♡ つてする千春の腰掴んで揺さぶつ  
て……一番奥にびゅーって精子出して、俺のだけにしたい……」

「つああ、ん……つ♡ うう♡ して、していいから……つふあ、あつ、あ～～つ♡」

ぢゅうつ♡

ちゅぼ♡ ちゅつぽ♡ れろれろろ♡

囁かれる熱っぽい言葉に興奮してしまう。あまりの快感に涙すら滲ませながら何度もク

リトリスに吸い付かれて甘えきつたひどい声しか出ない。

気付けば腕を抑えていた宗一郎さんの手をぎゅっと握っていた。

「ん……ナカひくひくしてきた、千春、イきそう？ さつきイつたばつかなのに、気持ちいい  
いまんまなんだな……」

「んつ、うう、あつ♥ だつて、舐められるの♥ きもち、よくてえ、あつだめ、そぞ、す  
ぐ、ばつぢやう……つ♥♥」

ちゅぱちゅぱ♥ ぬりゅぬりゅ♥  
れろれろれろろ♥♥

イケイケ♥ つて言うみたいに刺激を送り込まれる。濁った声が抑えられない。足先に  
また力が入つて、太ももで宗一郎さんの頭を挟んでしまう。

宗一郎さんは気にすることなく、繋いだ手の指を絡めてぎゅうつ……♥ と握ってくれ  
た。

「あつだめ、いく、あ、あ、あつ？♥ だめえ、宗一郎さんつ、も、ああつ♥ つなんか、

出ちや、～～～～つ♥♥」

ふしつ♥ ふしゅつ♥

ふしやあああ……つ♥♥

絶頂で何度も大きく震える身体と共に水音が迸る。思い切りかけてしまったんじやないか、と思つたけれど、宗一郎さんは身体を起こしてまだ溢れ出ているそこを熱っぽく見つめていた。

「はは、イキ潮すつゞ……上手に潮吹きも出来たな、千春」

「……しお、ふき……？　あ、あつ、おふとん……汚しちやつて……」めんなさい……」「初めてしたのか、潮吹き。ふ、そうか……いや、汚いもんじやねえよ。ああでも、足ガクガクになつちやつたな……」

労わるようタオルに包まれてしまった。

もう終わり……？　と目を瞬かせると、ほんのり赤らんだ顔が眉を下げる緩く笑んだ。

「わつ、私……へいき、です」

「ぶるぶる震えて何言つてんだ、続きたら千春、気絶しちまうぞ」

「平気つ……お、終わるのやです、お今まで、俺のにするつて、」

「バカ、無茶させたかねえんだよ、今度な、今度。次は奥まで俺のものになれよ、千春」

宥めるようにちゅ、と額に口付けられて何も言えなくなる。

正直なところ、激しくイつたからか小刻みな震えが止まらない。額いて身を預けるとい  
い子だな、と頭を撫でてくれた。

べしやべしやになつてしまつたシーツを丸めて、新しいシーツで私は、宗一郎さんに抱  
き締められて眠つた。

翌朝。

朝日が差し込む部屋で宗一郎さんよりも先に起きた。タオル一枚にくるまれた格好で眠つてしまつたらしい。着替えないといふと思つて身を起こす。

(一回、部屋に戻らなきや……ん、宗一郎さんも、起きた……?)

少し身じろいだあと、がばりと身体を起こす気配がする。

振り向くと、呆然とした顔で私を見る宗一郎さんがいた。

昨日まで赤かった顔がひどく青い。かさついた唇が震えながら開くのを、どこかスローモーションのように感じた。

「——千春……、ごめん……」

掠れ切つた声が広い部屋にむなしく木霊する。

その時になつて私はようやく思い知つた。

昨夜の夜這いは失敗だつたのだ、と。